



木更津市緑の基本計画策定懇談会（第2回） 2011. 10. 05

資料－3 木更津市の緑の課題

目次

1. 木更津市の緑の課題

■市民アンケートと緑の現状を受けた緑の課題の整理	1
■木更津市の緑の構造	2
1.1 まちづくりと連携した森・里・まち・海の緑の保全・育成	3
1.2 森・里・まち・海の連結	4
1.3 都市環境の改善・向上	5
1.4 都市の安全性の確保	5
1.5 健康で潤いのある生活・活動の場の提供	6
1.6 木更津市の魅力ある景観の保全・創出	6
1.7 市民・企業等の多様な主体の活動促進	7

1. 木更津市の緑の課題

「市民アンケート」と「緑の現状」を受けた木更津市の緑の課題の整理

都市特性と緑の問題点 資料-2

[都市概況]
 ・木更津市の特徴であり魅力の一つである港とまちの魅力と双方のつながりが薄れてきている。
 ・まちづくりに緑を十分機能させていない。

[緑の概観]
 ・市街化区域の緑被率がわずか10%と低い。
 ・自然度から見て希少な植生がわずかに残るが、保全の対象となっていないものがほとんど。

[生物の生育生息環境を育む緑]
 ・絶滅危惧種を含む多様な生物が生育・生息する多様な環境を有するが、盤洲干潟以外には殆ど保全の目が向けられていない。

[歴史・文化資源と一体の緑]
 ・顕在化されていない歴史・文化資源が多く、認知度が低い。殆どが保全の対象となっていない。

[まちを支える基幹的な生業の緑]
 ・森林・農地の荒廃、消滅、健全な公益的機能が発揮されなくなる懸念がある。

[郷土の緑景観と新たな都市の景観]
 ・昔からの緑豊かな郷土景観が失われつつある一方、良好な都市景観が形成されていない。

[都市と生活を守る緑]
 ・緑が果たせる防災機能が十分配置されていない。

市民の意向とニーズ 資料-1

・緑の量的な充足が必ずしも満足度と結びついていない。量的な充足とともに、質的な向上と緑を実感できる施策が求められる。 **グレードアップ**

・現状維持で留まることなく、保全、創出など多方面にわたる緑の対策が求められる。 **保全・創出**

・「地球温暖化等」や「安心・安全」は、全域において重要との認識が高まっている。 **安全・安心**

・市域全体で公園の拡充が求められる。とくに「緑豊かな広場のある公園」への要望が高い。
 ・「水辺と一体となった緑豊かな市民が親しめる場所の確保」「耕作放棄地を緑地として活用する方策の推進」「樹林地維持支援の仕組みの充実」へのニーズも高い。 **余暇空間**

・市民による緑の活動に取り組みに対し「だれでも参加しやすい仕組みづくり」が求められる。 **協働**

問題解決の
必要性

ニーズへの対応

木更津市の緑の課題

[課題整理の視点] ※次ページ
 ○木更津市の緑の構造(森、里、まち、海)を確かにする視点
 ・森、里、まち、海の4つが緑の構造を形成していることが大きな特徴。
 ・その特性をよりよく発現し、緑の構造を良好な状態で次世代へ継承していくために、各ゾーンとそれらをつなぐ緑が抱えている課題を整理。
 ○木更津市のまちづくりに緑が持つ機能を発揮させる視点
 ・緑のまちづくりに向けて、市内に点在する多様な緑の資源を保全、活用、あるいは創出する視点から総合的、計画的な取り組みの推進が必要。
 ・そのため、緑の役割・機能をふまえ、緑の資源の活用と新たな緑の創出の必要性等を含め、取り組むべき課題を整理。
 ○持続的な緑の取り組みを進めるための視点
 ・成長し続ける緑を長期にわたって日常的にきめ細かく成長を管理していくためには、行政だけでなく市民や企業等の力が不可欠。
 ・多様な主体による継続的な取り組みをより促進するための課題を整理。

緑の構造からみた課題

1. まちづくりと連携した「森」「里」「まち」「海」の緑の保全・育成が必要

2. 森・里・まち・海の緑の連結ネットワークが必要

緑の機能からみた課題

3. 都市環境の改善・向上が必要 **環境**

4. 防災など都市の安全性の確保が必要 **安全・安心**

5. 健康で潤いのある生活・活動の場の提供 **余暇空間**

6. 木更津市の魅力ある景観の保全・創出が必要 **景観**

持続的な緑の取り組みから見た課題

7. 市民、企業等の多様な主体の活動促進 **協働**

特性を活かした
魅力形成

取り組み拡充

木更津市の緑の特性 資料-2

[緑の概観]
 ・丘陵地・台地・低地・河川・海のありようが、本市の都市の緑の構造を決定づけている。
 ・緑被率は68%。本市の緑の大半は市街化調整区域に分布している。
 ・水田雑草群落とクヌギ・コナラ群集、スギ・ヒノキ・サワラ植林が顕著。

[生物の生育生息環境を育む緑]
 ・多様な生物が生育・生息する緑の環境を擁している。

[歴史・文化資源と一体の緑]
 ・緑と一体となった各時代の歴史・文化資源が点在している。

[暮らしに身近な憩いと交流の緑]
 ・海、港、まちなか、田園、山林にかけて、さまざまな屋外レクリエーション資源が点在している。

[まちを支える基幹的な生業の緑]
 ・生業として取り組まれている広大な森林と農地が存在する。

[郷土の緑景観と新たな都市の景観]
 ・海浜部景観、市街地景観、田園景観、山林景観と多彩な景観が展開する。

緑の取り組みの問題点 資料-2

[都市公園]
 ・都市公園は、整備量・質ともに不十分、配置が偏在。
 ・管理が不十分、老朽化、利用ニーズへの対応が遅れている。

[公共施設緑地・緑化]
 ・街路樹、道路緑地の生育、管理が不十分。
 ・公共施設の緑化に関する統一的な方針がない。

[民間施設緑地・緑化]
 ・本市には、民有緑地の保全・活用を支援する制度や、民有地の緑化を推進する制度等が導入されていない。

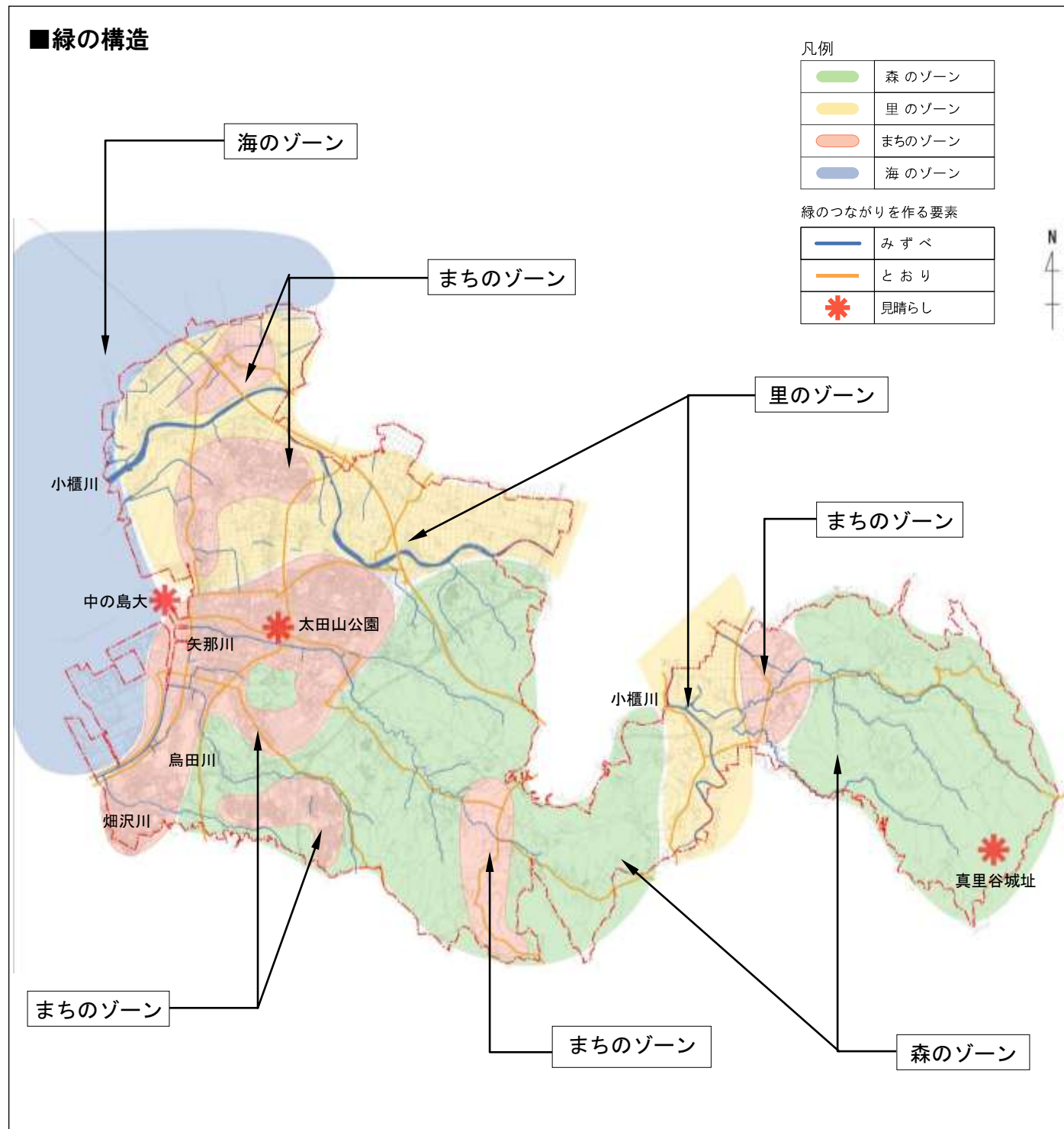
[地域制緑地]
 ・本市には、都市において持続的な緑の保全・活用を目的とする制度が導入されていない。

[市民等による緑の保全・創出等]
 ・市民の緑に関する活動は、一部の施設や一部の市民に留まっている。

※木更津市の「緑の構造」

東の丘陵地・台地の緑の山並み「森のゾーン」、北から東にかけての低地の広大な農地「里のゾーン」の大きな緑のかたまり、前面に広がる海に面する「海のゾーン」が骨格の緑をなす。

市域西側に配置されている4ブロックの市街地と矢那、富来田の「まちのゾーン」、それぞれのエリアを森と里と海がとりまく。



1.1 まちづくりと連携した森・里・まち・海の緑の保全・育成

①森林の公益的機能の維持が必要



○緑の適正な管理・育成による公益的な機能を維持・向上

- ・土砂の採取、産業廃棄物等の堆積、ゴミの不法投棄等が絶えず、今後交通の利便性の向上に伴い一層増加することも想定される（「木更津市土砂等の埋立て等による土壌の汚染及び災害の発生防止に関する条例土砂条例」は土砂等産業廃棄物の堆積そのものを禁止する制度ではない）。
- ・林業不振や高齢化等に伴い十分な管理が行き届かず、林地の荒廃が進行することが懸念される。
- ・森林の公益的機能が低下しないように歯止めをかける方策が必要である。

○現行制度に加え、都市の緑の観点から保全する方策

- ・現在森の多くの部分が、法に基づく地域森林計画対象民有林、保安林、鳥獣保護区、県条例による自然環境保全地域に指定されているが、樹木の伐採に対する規制が比較的強い保安林や自然環境保全地域（特別地域）は面積が小さく、他の制度は樹林の保全を直接目的とする制度ではない。
- ・「市街化調整区域における土地利用方針」をふまえ、本市の骨格を形成し都市を守る緑として、森林の機能を継続的に発揮することができるような支援策が必要である。
- ・とくに、市街地に接する緑や請西、桜井一帯のまとまった緑については、貴重な緑として保全する方策が必要である。

②農地・農村の多面的機能の発揮が必要



○耕作放棄地の発生抑制・活用

- ・小櫃川流域などに広がる農地や農村は、多面的な機能により都市の環境を保全するとともに、土地に根ざした農村文化や美しい田園景観を継承している。
- ・農地の多くが農用地区域に指定されているが、農業者の高齢化や農業所得の減少等により、農家戸数が減少し、耕作放棄地は増加傾向にある。また、森林と同様、耕作放棄地への産業廃棄物等の堆積の増加による景観の悪化、堆積物の飛散・崩落などによる周辺生活環境への影響が懸念される。
- ・耕作放棄地の拡大を防ぎ、農地・農業を守るとともに、耕作放棄地の活用方策が必要とされている。

○農村と都市の交流などへの活用等による田園環境維持

- ・農業者による観光農園や体験農園が増え始めているが、都市住民の自然とのふれあいや体験学習などへの本格的な対応はまだなされていない。
- ・市街化調整区域の土地利用方針をふまえ、農業や農村を貴重な資源として、良好な田園環境を維持していく支援策が必要である。

③まちに骨格となる緑の創出・育成が必要



○市街地の魅力を向上する豊かな緑の風景の創出

- ・市街化区域の緑被率は10%と低いにもかかわらず、まちに住む人びとが緑豊かと感じるのは周囲の山林・農地が見えることに依存している。身近な憩いの場などの緑の空間や交流拠点都市としての魅力ある都市景観、地球温暖化防止、防災等の重要性をふまえ、まちの中にも骨格となる緑を形成する必要がある。
- ・都市公園、公共施設などの緑が点在し、街路樹が一部整備されているが、特に公園、街路樹については、まちのなかの緑の核としての量的な充足と質の向上が求められている。
- ・社叢林などの既存の緑の資源の保全、公園や公共施設等の緑の充実、創出を図るとともに、これらの緑をそれぞれをネットワーク化するなど、わかりやすく利用しやすい、そして安全安心な緑を創出、育成していくことが必要である。

④海辺の干潟や連続する緑の確保が必要

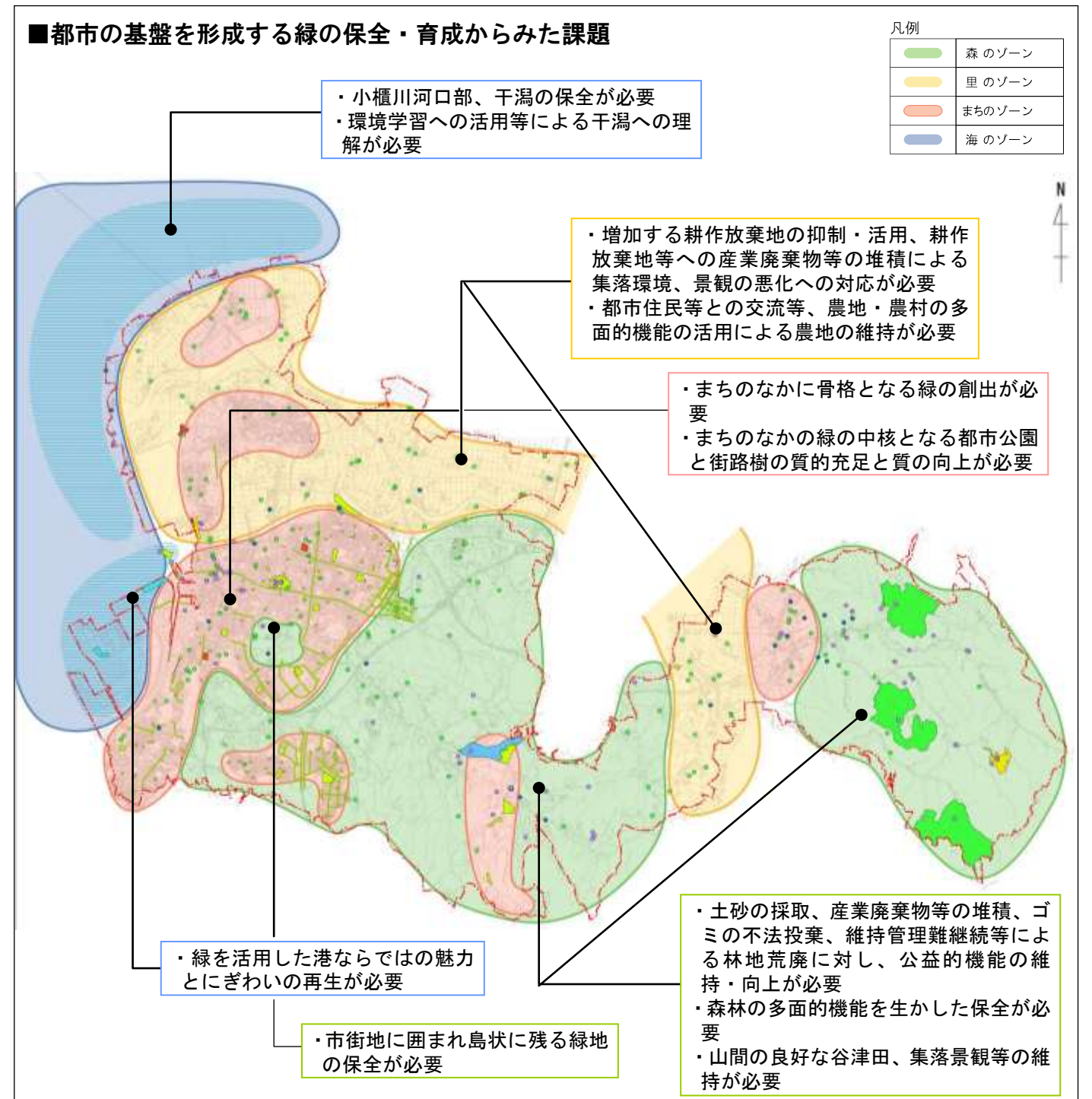


○干潟の保全・活用策

- ・首都圏有数の干潟を漁港、漁村、漁業とのつながりと一体的に守り、環境学習などへの活用を推進することが必要である。

○港の活性化に資する良好な空間の創出

- ・交通の利便性の向上等が、一方で中心市街地の空洞化、木更津港の市民離れを招いている。中心市街地とその発祥となった港とのつながりを形成し、歩いて楽しい快適な回遊空間や港の景観を楽しむ緑のスポット等を形成するなど、港ならではの魅力と賑わいを取り戻す方策が必要である。



1.2 森・里・まち・海の連結

【連結】

① “みず”による森・里・まち・海の連結が必要

みず

○河川がもつ多様な機能のまちづくりへの活用

- ・市内には、君津市の清澄山系から発し、森のゾーンで支川を集めつつまちのゾーンの脇を通り里のゾーンを貫流する小櫃川、森のゾーンから里のゾーンを通りまちのゾーンから海へ注ぐ矢那川、矢那川をよりコンパクトにした烏田川、畑沢川がある。
- ・河川の水辺はまちに潤いをもたらすとともに、生物の移動経路でもあり、さらに周辺の森林や農地と連続することで、より良好な生育環境が育まれる。また、風の通り道となって森や里から冷涼な空気を、海から海風をまちに運び都市気候を緩和する。
- ・河川を森・里・まち・海をつなぐ軸と位置づけ、親水機能や周囲の自然環境要素を考慮した河川の生態系ネットワーク機能の強化、風の通り道に配慮した河川空間の保全・整備を図ることが必要である。

○「田園空間軸」における緑の資源の保全・創出とネットワークの形成

- ・とくに小櫃川沿いについては、木更津市都市計画マスタープランで緑・田園をコンセプトとする「田園空間軸」として位置づけ、優良農地や小櫃川河口等を保全するほか、都市と共存する農業空間の整備と田園環境にふさわしい環境をもった市街地・集落の生活環境整備を図ることとしており、これを受け、小櫃川と一体となった自然環境や農地、田園景観等の保全・活用を図ることが必要である。

② “みち”による森・里・まち・海の連結が必要

みち

○緑による道路空間の高質化等

- ・まちと里を結ぶ県道87号、国道16号、県道90号・国道409号・県道33号、まちと森を結ぶ県道23号、まち・里・森を結ぶ国道409号・県道167号・169号などがあり、各ゾーンの緑を結ぶネットワークを形成する。
- ・とくにまちのゾーンでは、道路沿いの樹林や街路樹により、騒音の軽減や夏期には蒸散作用に伴う冷却効果で歩行者に快適な歩行空間を提供したり、河川と同様、風の道として都市の気候の緩和し、生物の移動経路となる。
- ・街路樹は市街地に整備されているが、連続している区間は少なく、緑のネットワークが形成されていない。また樹木の成長がよくない区間があり、とくに木更津市の顔となる空間である駅周りや中心市街地の街路樹の良好な成長が損なわれている。
- ・主要な道路を森・里・まち・海をつなぐ軸と位置づけ、周囲の自然環境要素も考慮した道路緑化の充実や環境に配慮した歩行者ネットワークの形成への対応が必要である。

○「文化軸（水と緑と歴史の文化軸）」における緑の資源の保全・創出とネットワークの形成

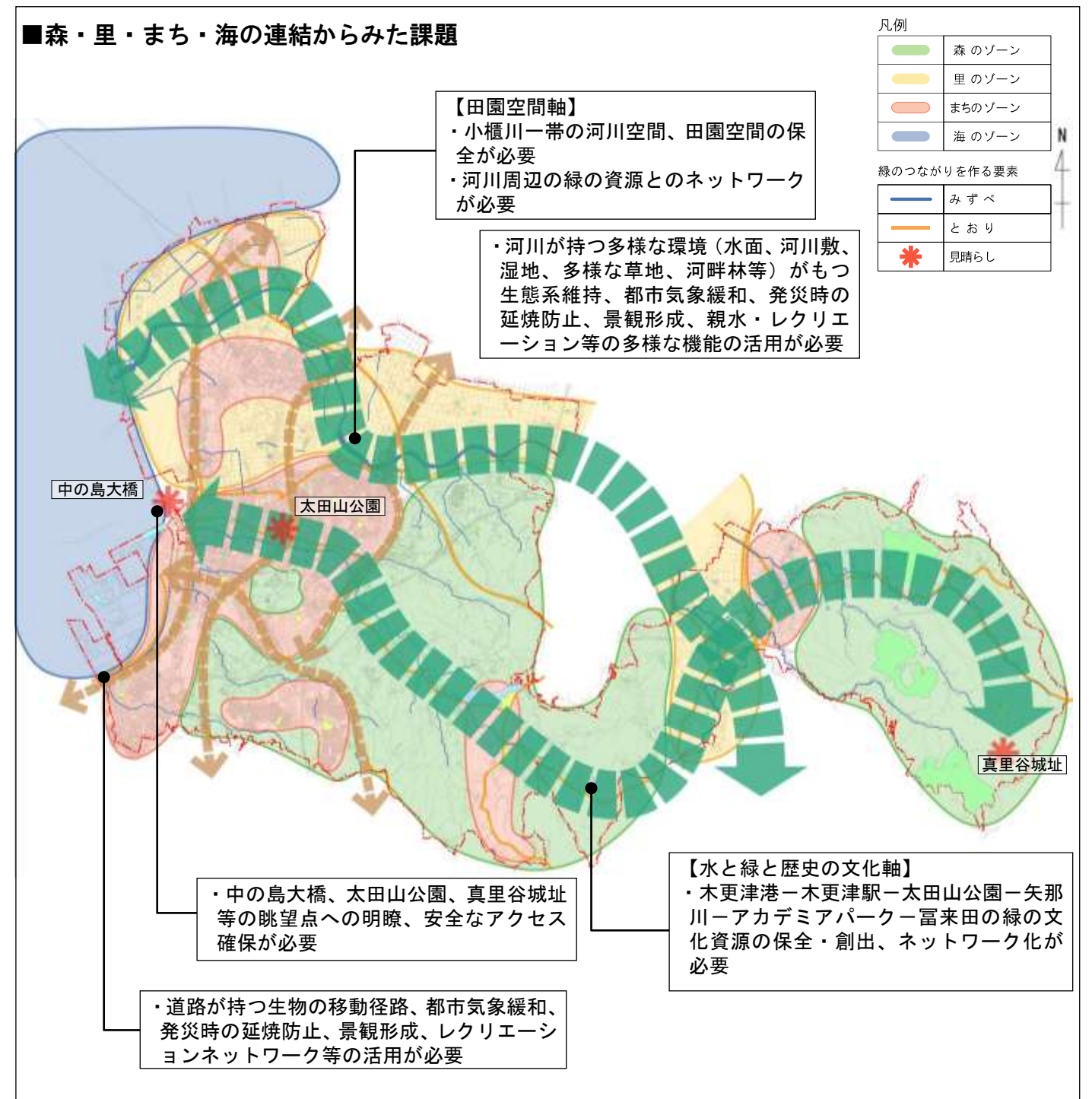
- ・木更津市都市計画マスタープランでは、木更津内港－真里谷城址間を田園空間軸と並ぶ木更津市のシンボル軸の柱である「文化軸」と位置づけている。「文化軸」は、この2箇所間の中心市街地の社寺群、太田山公園、郷土博物館、小中高・短大・大学の教育施設群、かずさアカデミアパーク、馬來田等、既存の歴史的、文化的資源等を活用して大きな軸を構成するとともに、緑や文化施設の配置を展開することとしている。これを受け、既存資源を核としたネットワークの形成、および文化軸上の緑の資源としての位置づけの明確化と資源価値の充実、アクセシビリティの向上等を図ることが必要である。

③ “見晴らし”による森・里・まち・海の連結が必要

見晴らし

○視覚的な繋がりの意識化

- ・木更津市は、標高差が200mで、市域をほぼ見渡すことができることが特色である。海からまちや里の背景として森が見える風景が、木更津市の風景の骨格である。
- ・いつでも見ることができ、視線を向けるということ意識することが森への気遣いを生み出し、まちや里のあり様を顧みるきっかけとなるように、まち←→森の視覚的な繋がりを果たせることが重要である。中の島大橋、太田山公園、真里谷城址など、要所にまち→森、森→まちのビューポイントとして位置づけることが望ましい。



【環境】

1.3 都市環境の改善・向上

①都市環境の改善する緑の保全・創出が必要

都市環境

○緑の蒸散作用によるヒートアイランド現象の緩和

- ・木更津市においても発生しているヒートアイランド現象の緩和にまとまりのある農地、樹林地などの緑被地の存在が重要な役割を果たしているが、市街地内の緑被地も充実させていく必要がある。
- ・海や森・里の冷涼な空気を呼び込む風の道となる河川空間や道路緑化空間を保全・活用するとともに、市街地内の緑の保全や市街地の大半を占める民有地の緑化を推進することが必要である。
- ・夏期に樹陰を創り出す街路樹や公園、公共施設の緑、社叢林など、小さくてもクールスポットとなる緑を町なかの要所要所に配置していくことも必要である。

○緑の二酸化炭素吸収・吸着機能による温暖化防止

- ・緑は二酸化炭素の吸収・吸着機能があり、地球温暖化の防止に資するため、森や里だけでなく、市街地においても、豊かな緑を積極的に保全、創出していくことが重要である。

○緑の騒音低減機能や大気浄化機能の活用

- ・とくにまちなかでは、騒音の低減や大気浄化効果のある緑の創出を図っていくことが必要である。

②多様な生き物の生育・生息する緑の保全・創出が必要

生物

○東京湾唯一残る広大な干潟空間の維持、向上

- ・盤洲干潟は、「首都圏の都市環境のインフラの将来像」（国土交通省）で「保全すべき自然環境」に位置づけられ、九都県市の「広域的な緑のネットワークの将来像」では東京湾岸を「湾岸部の緑の回廊の形成」を図ることとしている。
- ・本市においても基本構想で盤洲干潟は市民の貴重な財産として次世代に継承し、自然環境の保全・維持の推進を図ることとしている。
- ・東京湾に残されたこの自然海岸一帯を、豊かな生態系を構成する多様な生き物を育む場として、自然環境の保全と質的な維持を図る必要がある。

○貴重な生き物も生息する豊かな自然環境の保全、育成

- ・市内に分布するさまざまな広葉樹林、半自然草原、河川氾濫原、沢沿い、水田等々の多彩な緑の環境が、絶滅危惧種をはじめとする多様な生物の生育、生息を可能にしている。これらの緑を保全するとともに、生息環境として維持するための質の向上を図っていくことが必要である。

○生物の移動経路となる多様な空間の保全、創出

- ・生物が生育・生息に適した場所の緑を結びネットワークを形成していくことが必要であり、河川や水路を軸にため池、調整池周りの生物に適した環境の保全や、まちなかの緑などを配置していくことが重要である。

【安全・安心】

1.4 都市の安全性の確保

①河川氾濫・土砂崩壊などの災害の防止・抑制が必要

災害

○土砂崩壊を防止し侵食を抑制するなどの災害に強い森づくりと適正な管理

- ・全国的に集中豪雨による河川の氾濫、土砂崩れ、がけ崩れ、洪水などが多発しているが、本市の地形的特性上多くの急傾斜地があり、東側の真里谷や矢那、下郡、犬成、笹子などの山間部だけでなく、市街地南部外縁の畑沢、小浜、桜井などにも点在している。
- ・森林は下層植生や落枝落葉が地表の侵食を抑制するとともに、森林の樹木が根を張り巡らすことによって土砂の崩壊を防いでおり、森林を保全するとともに災害に強い森づくりや適正な管理が求められる。

○浸水発生を抑える浸透・保水機能のある緑とオープンスペースの確保

- ・小櫃川、矢那川沿いには、浸水想定区域が想定されている。都市では、建築物や舗装により地表の被覆面が増え、雨水が地下に浸透しにくくなり、集中豪雨時などには短時間に大量の雨水が河川や下水道に集まり、その結果河川の氾濫や地盤の低い地域の浸水が発生するようになっている。
- ・まちなかの浸透・保水機能のある樹林地やその周囲の農地を保全する必要があり、また公園緑地などのオープンスペースの確保も重要である。

②災害時の安全な避難経路、避難場所の確保が必要

避難空間

○避難場所となる公園確保と防災性能の向上

- ・東日本大震災をきっかけに、防災まちづくりに対する関心が高まっている。木更津市では、地域防災計画で公園や小中学校予定地等を一時避難場所や応急仮設住宅設置予定箇所に指定しているが、これらの公園等における防災性能の向上を図るとともに、安全な避難の観点から必要とされる公園配置の見直しを行うことが重要である。

○安全な避難ルートと避難路空間の確保

- ・十分な歩行幅員の確保や防火樹植栽など、避難場所に至る安全なルートを確保することが重要である。
- ・避難ルートに当たる民有地においては、倒壊の危険性のあるブロック塀を避け、接道部分の生垣などを設けることが望ましい。

○延焼防止にも役立つ緑とオープンスペースの確保

- ・避難場所以外の広幅員道路の街路樹や公園緑地などのオープンスペースは、延焼防止にも役立つことから、これらの空間の適切な配置を進める必要がある。

1.5 健康で潤いのある生活・活動の場の提供

①身近なレクリエーションやコミュニティ活動などの緑の充実が必要

○公園不足地域の解消

- ・市民に身近な住区基幹公園の整備は比較的進んでいるが、未整備公園があり早期の着手が必要とされる。
- ・中心市街地や北部や東部の市街化区域などでは不足している地域があるため、既存ストックの活用を含め適切な配置が必要である。
- ・総合公園、運動公園などの大規模な公園の整備の検討を行う必要がある。

○公園空間の安全性、快適性

- ・多くの公園が老朽化しており、バリアフリー対応も不十分である。市民のニーズに即し生活に豊かさをもたらす場として充実を図ることが必要である。
- ・とくに、本市の公園はこれまで高齢者の利用を促進する観点に重点を置いた整備を行ってきていない。市域の半分以上が超高齢社会を迎えている現在、高齢者の健康づくりに資する公園や安全安心に利用できる公園づくりを進める必要がある

○都市環境の課題に対応する公園整備

- ・市街地のまとまった緑を提供する公園は都市環境の改善に効果があり、市街地のヒートアイランド現象の緩和、二酸化炭素吸収減に資する公園の整備が必要である。

②自然とのふれあいや環境学習、郷土学習の場となる既存資源の活用が必要

○シンボル軸・田園空間軸上の緑の資源のネットワーク

- ・都市計画マスタープランで木更津港～真里谷城址を水と緑と歴史のシンボル軸、小櫃川は田園空間軸と位置づけられており、これらは緑のネットワークを形成する重要な要素である。軸上やその付近に位置する自然資源や歴史・文化資源等の存在などそれぞれの場所の特質を活かし、サイクリングやウォーキングなど健康づくりやレクリエーションの場として、ルートの設定や親水機能の強化、景観などに配慮し、道路や河川空間の活用、整備を図ることが必要である。

○都市と農村の交流

- ・農林業後継者の育成、耕作放棄地発生の抑制や森林の適正な管理が課題となっているなか、都市住民と農村の交流、レクリエーション等の余暇活動として行う農作物の栽培、農作業を通じた教育、障害者・高齢者対策への関心が高まるなど、都市と農村の交流を進めることが強く求められている。
- ・農業公園、市民農園など農業者と都市住民の交流することができる場を設けるなどにより、都市住民の農作業体験等のニーズに対応するとともに、農地・農村の果たしている役割や重要性について理解を深める機会の充実や、都市住民からの支援の仕組みを形成する必要がある。

○既存資源の活用による郷土学習、環境学習

- ・山林については、里山の伝統文化や雑木林の保全方法などを実際に体験しながら学ぶ機会の充実や、都市住民の支援の仕組みを形成する必要がある。農林業体験は子どもたちの食育や環境学習、地域を知る郷土学習としても重要である。
- ・馬来田の古墳群一帯や真里谷城址なども環境学習、郷土学習の場として活用を図ることが望ましく、必要な対策を講じる必要がある。
- ・市内に点在している数多くの塚、祠、道標、湧水など緑と一体となった小さな歴史・文化資源や巨樹・古木は知名度が低く、保全の対象となっているものは少ない。これらを郷土の歴史性とその場所らしさを刻む資源として市民とともに顕在化する活動を行い、必要に応じて保全することが望ましい。

【余暇空間】

公園

交流・学習

1.6 木更津市の魅力ある景観の保全・創出

【景観】

①郷土の優れた景観の保全が必要

○小櫃川周辺一帯の田園景観

- ・小櫃川周辺一帯は、広がりのある水田景観とそこに点在する集落や社叢林などの樹林地景観が特徴であり、保全し継承していくことが望ましい。

○谷津田景観や屋敷林・生垣景観等

- ・矢那や真里谷の谷津田景観や、森を背景に建つ屋敷景観は、自然と融合した文化的な景観として保全していくことが望ましい。

○市街地を囲む台地の緑

- ・旧市街地を囲む東側から南側にかけての台地のエッジの緑は、木更津市の景観特性の一つであり、緑の少ない市街地に潤いを与える大きな要素となっている。台地上の開発が進むに連れて崖線の緑の連続が失われぬように、市街地の背景をなすこの緑を保全する必要がある。

○巨樹・古木、社叢林景観

- ・指定文化財以外の緑と一体の史跡や巨樹・古木、社叢林などはスポット的な緑であっても郷土に欠かせない景観であり、必要に応じた保全策を講じることが望ましい。

②国際的、交流拠点都市として相応しい都市景観の創出が必要

○風格のある都市景観

- ・かずさアカデミアパークを中心とする国際的な研究開発都市、広域交通網の整備進捗を背景とした交流拠点都市をめざし、自然と調和した良好なまちづくりを行うこととしており、その名にふさわしい、風格のある快適な都市景観の形成が求められる。
- ・特に木更津市の玄関口である木更津駅周りや東西に伸びる道路は、来街者に第一印象を与える空間であるが、街路樹の生育が悪く緑が乏しい。市の顔として緑豊かな風格のあるイメージづくりが必要である。

○中心市街地や新市街地の景観

- ・中心市街地や金田地区等については、新市街地の幹線道路、公共施設や大規模民間施設は人びとに与える印象が大きいため、緑を活かした良好な景観づくりが必要とされる。

○水辺景観

- ・小櫃川の河口や下流域、まちなかの矢那川、烏田川の下流域の緑と一体となった河川景観は、良好に維持していく必要がある。

○港の景観

- ・臨海部の存在は木更津市の大きな資源の一つである。港湾空間は客船が廃止されて来街者の目に止まることが少なくなったが、吾妻地区については「海辺の魅力を活かした親水空間の整備による賑わい空間の創出」が図られることから、港湾緑地だけでなく、隣接空間を含め緑豊かな人を惹き付ける魅力のある景観を形成していくことが必要である。
- ・併せて、盤洲干潟一帯の環境と木更津港の港湾機能に配慮しつつ、海辺沿いに緑の景観の連続性を確保していくことが望ましい。

○暮らしに身近な地域空間

- ・生垣や接道部の緑化、ベランダ・壁面緑化の推進などによる緑豊かな景観づくりが望まれる。

1.7 市民、企業等の多様な主体の活動促進

【協働】

①緑のまちづくりへの多様な主体の参加促進が必要

○活動の継続・拡充

- ・公園、道路、小櫃川、木更津港で、自治会・町会や市民団体、漁協、NPO法人等、90近い団体が活動している。公園については6割近い89公園で62団体が活動している。
- ・盤洲干潟では清掃のほか、干潟観察会や植物調査なども行っており、真里谷や笹子犬成地区の里山では森林整備、景観整備、自然観察、環境教育等の活動が行われている。
- ・現在活動を行っている団体が継続的に行動していくことができるように必要な支援を行うとともに、活動の拡充に向けて、意欲がある市民への活動のきっかけづくり、活動場所の提供や、活動に関わるさまざまな情報提供などを展開し、参加を促進することが必要である。

○企業の参画

- ・今後、企業の社会貢献活動としての里山活動の誘致等を行っていくことも必要である。

○里における市民活動誘引

- ・以上のように森、まち、海、河川、道路では多くの活動が行われているが、市民との交流による農地の保全に関する取り組みはまだ行われていない。農家支援の仕組みを形成することが必要である。

②まちぐるみの緑の取り組みに向けた多様なメニューづくりが必要

○参加意欲の向上

- ・まちぐるみの緑の取り組みに向けて、緑の大切さや必要性についての啓発、市内の緑の資源に関する情報発信、子どもたちの環境教育の推進等によりまず緑の理解者を増やし、さらに緑のまちづくりに取り組む市民や団体等の顕彰事業等を行うことにより、市民の意欲を高めていくことが必要である。

○市民団体自らの発想と創意工夫

- ・干潟や里山における活動のように、公園などの緑空間についても、清掃に留まらず計画段階からの市民参加の促進、公園施設の維持管理、花壇づくり、自然観察会やプレイパーク化による子育て支援など、市民団体が自らの発想と創意工夫で主体的に関わる部分を増やしていくことにより、地域全体の保全、育成、活用、創出に繋がる活動に発展していくものと考えられる。